古代エジプトの軍事会議
ー第2中間期からトトメス3世の治世末期までー

モハセン・ネグメルディーン*

松村 由美 訳

この講演録は、M. M. Negm Eddin, "Council of War [Seqnenre – Kamose – Thutmose III]," *Egyptian Journal of Archaeological and Restoration Studies*, Volume 1, Issue 1, 2011, pp. 15-30. (http://ejars.sohag-univ.edu.eg/Issues.aspx?q=1) からの引用である。なお、本来の原稿にあった象形文字の出典は削除し、その英訳は A. H. Gardiner, "The Defeat of the Hyksos by Kamose: The Carnarvon Tablet, No. I," *JEA* 3, 1918, pp. 95-110.; R. O. Faulkner, "The Battle of Megiddo," *JEA* 28, 1942, p. 3.; E. F. Wente, Jr., "The Quarrel of Apophis and Seknenre," in W. K. Simpson (ed.), *The Literature of Ancient Egypt*, 3rd edition, New Haven and London, 2003, pp. 69-79 のものに差し替えた。

1 序

古代のエジプト史のなかで(絵として)描かれたり、(軍事文書として)記録された数多くの戦いの中で、幾つかのものは王「ファラオ」によって開催された「軍事会議」をそのメンバーと結び付けて、戦争を開始したり軍事的な戦略を選択する際に重要で難しい選択をしていた。

これらの会議での主要な事柄は、王と大臣たちの対話であり、それは王が理想的な解決策と目先のきいた戦略計画を持っていたことを反映している。

この軍事会議でのメンバーたちの役割は検討されており、王は彼らのアドバイスに入念に耳を傾けていた[1]。

王がメンバーたちの疑念や不確実性に対して決定を下し、その結果生じる成功によって彼のすぐれた判断を明示する、というパターンが基本的である[2]。

---

* カイロ大学考古学部エジプト学科

1 王が専門の廷臣と助言者を抱えていたことは、古王国時代から知られている。王の宮殿、しばしば接見の広間である "djadw"に座る王の描写は一般的であり、王はそこで重要な事柄について、また時には楽しみのために助言者や親しい人達にと話している。

2 H. Goedicke, *The Quarrel of Apophis and Seqenenre*, Chicago, 1986, p.1.

2 古代エジプト史の軍事会議

2.1 政治的会議、第 4 王朝（古王国時代）

ウエストカー・パピルス[3]（ベルリン・パピルス 3033）では我々はクフ(ケオプス[4])王によって開かれた（接待会議）という形の政治的な会議を見出す。それは、クフ王と彼の血筋を継ぐことになる王たちの誕生という 1 つの枠組みを持つ物語のなかの一連の物語からなっている。そのエピソードは、王が一日を退屈に感じ、自身の慰めになるものを得るために王宮のあらゆる部屋を訪れたところから始まる[5]。

また、「メリカラー王への教訓」は忠実な会議のために王に必要なものを強調している。「その大いなる者たちが多いなる者である大いなる者は偉大である。側近をもつ王は勇猛である。高貴な者は大いなる者たちの中で豊かである。」[6]これは王が廷臣の助けを得て布告を行っていたことを述べているわけではないが、たしかに王にとっての廷臣の重要性を示している。とりわけそれは、王が他者を必要としていたことを示している[7]。

何点かの中王国時代の文学テキストは、王宮に住まう王が賢人たちによる気晴らしを待っている様子を描いている（センウセルト 1 世のベルリンの革の巻物など[8]）。

2.2 宗教会議、第 13 王朝（中王国時代）

ネフェルホテプ 1 世王の会議は、王がアビドスのオシリス神の神殿への聖なる巡礼を準備のために宮殿の謁見の間で開かれた[9]。

3 軍事会議

この種の軍事会議の最初の事例は、第 11 王朝（中王国時代）、メンチュホテプ 2 世（ネブヘペトラー[10]）の治世に遡る。それは王がきわめて重要で急を要する決定を下すために軍の司令官たちを招集した時に開かれたものであった。

その後、幾つかの軍事会議が古代エジプト史において開かれており、本研究はそれらの中でも重要なものを選んでいる。

---

[3] H. Jenni, “Der Papyrus Westcar,” *SAK* 25, 1998, pp. 113-141.
[4] 第 4 王朝 2 番目の王。
[5] A. M. Blackman, *The story of King Kheops and the Magicians*, London, 1988, pp. 1-17.
[6] J. F. Quack, *Studien zur lehre fur Merikare*, Wiesbaden, 1992, p. 30.
[7] G. J. Shaw, *Royal authority in Egypt's 18th Dynasty*, Oxford, 2008, p. 75.
[8] A. de Buck, “The Building Inscription of the Berlin Leather Roll,” *Studia Aegyptiaca* 1, Rome, 1938, pp. 48-57.
[9] G. Callender, “The Middle Kingdom Renaissance,” in I. Shaw (ed.), *Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford, 2003, p. 179.
[10] Mohsen Negm, “Council of War of King Montu-hotep (neb-hepet-Re?),” unpublished research.

3.1 第2中間期の軍事会議

当時、エジプトは外国人であるヒクソス（又はアジア人）に侵略されており、いくつかの地域に分割されていた。ヒクソスはデルタ地方から中部エジプト（アシュート州）までを支配した。一方で、テーベの王はアシュートからエレファンティネ（現在のアスワン）までを支配し、ヌビアはクシュの総督によって支配されていた。軍事会議は、テーベの王たちとヒクソスのあいだの戦いのために開かれた。最初の軍事衝突は、セケンエンラー・タア（ヒクソスの王アペピ（アポフィス）時代の南部の統治者）の治世に起きた。

3.1.1 セケンエンラーとアペピの争い

第2中間期の最も有名な文学作品として、「セケンエンラーとアペピの争い」が挙げられる。

これは、その出来事から数世紀後に書かれたラムセス時代のテキストであり、さらには断片的である。また、「アメンエムハト1世の教訓」のコピーを含むサリエ・パピルス1に記録されている[11]。

テキストの冒頭部分は、比較的良い状態で保存されている。これは、アペピからセケンエンラーに送られた命令もしくはメッセージに対する背景を述べている[12]。

時の（正しい）王として（役目を果たす）主（生命、繁栄、健康あれ！）がいなかったので、エジプトの国土は苦難の中にあることとなった。セケンエンラー王（生命、繁栄、健康あれ！）は（しかし）南部の町の統治者（生命、繁栄、健康あれ！）であり、苦難はアジア人の町にあった。一方でアペピ王（生命、繁栄、健康あれ！）はアヴァリスにおり、国全体が彼に貢物を支払い、エジプトのあらゆる優れた産物をもたらすだけでなく、彼らの税全てを届けた[13]。

3.1.2 アペピの意向と軍事会議

この部分に関して、テキストは幾つかの断片的な言葉を残して、パピルスの最初のページの終わりにまで及ぶ欠落によって分断されている。喪失した部分は文の半分以上に達しているが、既に翻訳されている。しかし、もしアペピ王とそのメンバーたちによる軍事会議がここで明確に述べられているという事実がなければ、物語の趣旨はひどく不明瞭であった。結局、内容はほとんど逐語的に繰り返されたものであったが、たとえ表現の詳細が不確実のままであったとしても、内容を構築することができた。

それから何日も経過した後、王[アペピ、生命、繁栄、健康あれ！] は彼の[宮殿]の[高官たち]を招集さ

---

[11] E. A. W. Budge, *Facsimiles of Egyptian Hieratic Papyri in the British Museum*, Second Series, London, 1923, pl. LIII-LV; A. H. Gardiner, "Late Egyptian Stories," *Bibliotheca Aegyptiaca* 1, Bruxelles, 1932. pp. 85-89.
[12] H. Goedicke, *op. cit.*, p. 3.
[13] W. K. Simpson, *The Literature of Ancient Egypt*, 3rd ed., New Haven & London, 2003, pp. 69-70.

せた。[そして彼は、使者]が川[について・・・]苦情[を携え南部の町の王へと]送られる[ように彼らに提案した]。[しかし、彼はそれを自分でまとめることができなかった。そこで彼の]書記と賢人たち[・・・]そして高官たちは[言った。「おお、君]主よ・・・」。[14]

コメント：

このテキストの一節は、導入部分となっている。

「それから何日も経過した後・・・」という表現は、時間の経過を示している。

ここで、アペピがセケンエンラーに警告のメッセージを送ることを望んだのは、おそらくテーベの軍備を知った後のことであろう。この考えがアペピの心中に生じた後、王は王宮で賢人と優秀な書記を含んだ会議を開いた。ゲーディケによれば、返事の予見できないメッセージをセケンエンラーに送ることは、アペピの策動の一部であったと考えたくなる。後で言及されるセケンエンラーのメンバーたちの呆然とした沈黙は、このような主張と一致する[15]。このメッセージに関して、このパラグラフのわずかに現存する語のなかで「命令に対する返答」〔*smi n mdt*〕に注目することができる。この送られたメッセージが、前後関係を持たないものの、アペピの書記によるものであり、アペピが自身で決断を下す能力に欠けていたことを示唆していることが強調される。これは「王の物語」(Königsnovelle)に極めて類似したエピソードであるが、メバーたちが解決策を見出すことができなかった後で王が決定を下すという通常の形式はここでは見られない[16]。

その後、この物語は、アペピの使者のテーベへの到着を物語る。使者は、セケンエンラーの前に連れて来られ、セケンエンラーは彼に尋ねる。「なぜお前は、私のもとへ着くように南部の町に送られたのか？何のための旅なのか？」王のこの発言の後、使者はメッセージを届けた。

「[我々の主は、町の東（地区）にいる]カバたちが池[から引き上げることを要求しております]。[なぜなら]、[彼らの騒音が我々の耳の中にあり、昼も夜も我々を眠ら）せないからです。」（そしてアペピ王（生命、繁栄、健康あれ！）が彼らに答えて言うには、「私は（南部の町）の王に（メッセージを送るであろう。・・・命じる・・・）（・・・我々が）保護者として彼と共に（ある神の力を見極めんとするために。）彼は神々の王、アメン・ラーを除いて、（国中）のいかなる神も頼りにできない。」

使者は、次に彼に答えた。「次のことを言うために、私をあなたの元へ送ったのは、アペピ王（生命、繁栄、健康あれ！）なのです。」『町の東（地区）にいるカバたちを池から撤退させよ。なぜなら、彼らの騒音が彼の耳の中にあり、彼らは昼も夜も我々を眠ら）せないからだ。』[17]

---

[14] *Ibid.*, p. 70.
[15] H. Goedicke, *op. cit.*, p. 18.
[16] Gunn and Alan H. Gardiner, "New Renderings of Egyptian Texts: The Expulsion of the Hyksos," *JEA* 5, 1918, p. 41.
[17] W. K. Simpson, *op. cit.*, pp. 70-71.

3.1.3 セケンエンラーの反応

アペピのメッセージに、セケンエンラーは唖然とした。そして彼は、即座にその深刻な政治的意図を理解した。その後セケンエンラーは使者に対し、必要と思われるあらゆる物を与えるよう命じた。そして、セケンエンラーは使者に国へ戻り彼の王に、セケンエンラーはアペピが言ったことすべてを実行するであろうと伝えるよう言った。アペピへの忠誠を確信させることで、セケンエンラーはヒクソス王をなだめようと努めていたように思われる[18]。

3.1.4 セケンエンラーの会議

それから南部の町の王は、彼が従えるあらゆる優秀な軍人と重臣たちを招集した。そして彼は、アペピ王（生命、繁栄、健康あれ！）が彼に送ったことについてすべての問題を臣下たちに繰り返した。それから彼らは賛成か反対か王に答えることができず、一様に長い間沈黙した[19]。

コメント：

物語のこの部分において、2回目の会議があることが分かる。この会議は、困難な立場での対応と判断を得るために、セケンエンラーと彼の大臣・軍司令官によって開かれたのである。しかし、もし臣下たちがセケンエンラーの難局を支援できない場合は、（パピルスに書かれたように）大いに当惑して、一斉に沈黙した。彼らは王に、「賛成」あるいは「反対」と返答する事ができなかったからである。しかしながら、不幸なことに物語の結末は現存していないものの、おそらくは話の主人公であるセケンエンラーの勝利に関連している。

最後に、共通点と相違点を述べるために、アペピとセケンエンラーの会議を対比して見てみたい。2つの会議はともに王の宮殿で行われたが、会議の構成員に関して違いがある。アペピの会議に関しては、賢人と書記を含んでおり、一方、セケンエンラーの会議は大臣と軍司令官から成っていた。そして、最初の会議は文学的メッセージを作り出す役割を、2番目の会議は運命を決定する役割を担っている。

3.2 カーメス

カーメスの時代、軍事会議は2つの方面、すなわち北（アジア人）と南（クシュ人）との戦争のために開かれた。我々は、これらに関する王の文書を持っている。カーメスは、本来カルナックのアメン神殿に設置されていた2つの石碑を立てた。一つは、完全な状態で残されている。もう一方は、冒頭の部分だけが現存しており、2世紀後の、（書記の練習用の）筆記板に筆記体で書かれた古代の書写によって伝わって

[18] T. Säve-Söderbergh, "The Hyksos Rule in Egypt," *JEA* 37, 1951, p. 67.
[19] W. K. Simpson, *op. cit.*, p. 71.

いる[20]。

筆記板は最初、カーナヴォン・タブレット No.1 として知られることとなった。これは、ヒエラティックで書かれた一対の筆記板であり、デル・エル・バハリから近い、ビラビにある略奪を受けた墓の入り口付近の岩棚で陶片やミイラの断片の中から見つかった[21]。

以下の研究は、カーメスの最初の石碑とカーナヴォン・タブレット No.1 のヒエラティックの複写を用いている。

3.2.1 カーメスの会議

会議を開く王の命令：

陛下は、宮殿で彼に付き添う高官たちの会議に向けて話した[22]*。*

コメント：

カーメスは、宮殿内で軍事会議を開くよう命じた。この会議 "*nḏwt-r*" は、陸軍と海軍の指揮官を含む高官たちで構成されていたであろう。そこには一連の簡潔な方針のみが示されている[23]。この "*nḏwt-r*" という語は、アペピの会議においてもセケンエンラーの会議においても使用されなかった。それゆえ、筆者はここで、カーメスの会議が議決し、またそれが特定の重臣たちによって成立したのではないかと考える。そして、この事例は後述の 2 つの例には存在しない。

会話の部分：

カーメス曰く：

「私は、どのような目的が私の力にかなうかを知りたい。一人の王がアヴァリスにおり、もう一人がクシュにいる。そして、私は国を分かち合うアアム（アジア人）とネグロ―各々が黒い土地の分け前を持っている―と一緒になり座している。私はメンフィス、エジプトの水(?) まで彼(??) を通さない。見よ、彼はシュムンを制圧(?) し、誰も休息せず、セチュウの召使い（？）によって荒廃されている（？）[24]*。私は彼と格闘し、彼の腹を切り裂くだろう。」*[25]

コメント：

ここでは、我々はカーメスと廷臣たちによって交わされた会話のすべてをもっている。アペピの会議とセケンエンラーの会議の両方にはこの種の発言を見いだせない。初めに、カーメスは廷臣たちに会議の意

---

[20] H. Goedicke, *Studies about Kamose and Ahmose*, Baltimore, 1995, p. 31.
[21] Alan H. Gardiner, "The Defeat of the Hyksos by Kamōse: the Carnarvon Tablet, No. I," *JEA* 3, 1916, p. 95.
[22] B. Gunn and Alan H. Gardiner, *op. cit.*, p. 45.
[23] A. J. Spalinger, *War in ancient Egypt*, Oxford, 2005, p. 2.
[24] Alan H. Gardiner, *op. cit.*, p. 99.
[25] *Ibid.*, p. 102.

図を告げるため、話し始めた。

ここで、カーメスの考えはエジプトにおける特定の政治的問題に関係しており、「民族主義的な」大望でない[26]。アジアの君主は北部はアシュムネインまでを支配し、もう一方（クシュの君主）はクシュとヌバを占領していた。そしてカーメスは実権もなく彼らの間に位置していたのである。

この発言から、ナイル川流域での描写された政治情勢を確認することができる。それは、３つの主要な範囲に分けられる。１つはクシュから成り、もう１つはアヴァリスにあり、そして３つ目が上エジプトを含むケメト「エジプト」として表されている。

会議の返答：

次に彼の会議の大いなる者たちが言った[27]。

「見よ。アアムたちはクサエまで（前進(?)）し、彼らは一斉に彼らの舌を引き出して(?) います。我々は、我々の黒い土地の領土において安全です。エレファンティネは強力で、中部地域(?) はクサエまで我々とともにあります。その畑の最も良い所(?) は、我々のためにすきで耕されています。我々の牛はパピルスの湿地にいます。スペルト小麦は我々の豚のために送られて(?) います。我々の牛はそのために・・・連れ去られません。彼はアアムたちの地を所有し、我々は黒い土地を所有します。そして我々に（向かって来て(?)）、上陸し（?)、敵対行動する(?)いかなる者に対しても、我々はその者に対して対抗措置を取ります。」[28]

コメント：

ここでは、カーモスの会議メンバーたちはアジア人に対しての肯定的な意見、つまり、状況が完全に悪いわけではないことや、最良の土地が自分たちにもたらされ、すきで耕され、牛はパピルスの湿地にいると述べて、王の不安をやわらげようと努めて、彼らの主人に返答している。しかし、彼らは最後の部分で発言を終える前に、攻撃を意図するいかなる者に対しても行動をとるという約束を付け加えている。その発言には説得力がほとんどなく、なによりもまず政治的な懸念をしている王の機嫌を取ろうとしたように思われる[29]。

カーメスの反応と決定

今や彼らは陛下の心において不快であった。―「お前たちの助言に関しては・・・これらアアムたち・・・（見よ、私は）幸運が来るまで(?)アアムたちと（戦う(?) であろう)。もし・・・嘆きとともに・・・。国中が（私を(?)）テーベで（勝利に満ちた支配者(?)）、カーメス、エジプトを保護する者（として歓呼して迎えるであろう。)」[30]

---

[26] H. Goedicke, *op. cit.*, p. 36.
[27] Alan H. Gardiner, *op. cit.*, p. 102.
[28] *Ibid.*, p. 103.
[29] H. Goedicke, *op. cit.*, p. 45.
[30] Alan H. Gardiner, *op. cit.*, p. 104.

コメント：

ここで、カーメスは融和的なアプローチに不快感を表し、廷臣たちの発言をはねつけている。そして彼は最初に軍の司令官を叱責し、アジア人たちと戦う決断を下した。また、彼は自身を勝利の王、エジプトの保護者と考えている。話が突然始まり、その後の部分から、第一人称での遠征の描写が始まる。この点において、このテキストはカーメス自身によって述べられたかのように記事を表している[31]。

我々は、ここに本物の「王の物語」(Königsnovelle)の体系を見ることができる。カーメスはまさしく戦士であり、彼の決心は敵からエジプトを護るための最も強いものであった。その結果、他の誰でもなく、カーメスこそが解放という困難な使命の先駆者となった。我々は、この話の書き手がアジア人と戦うためのカーメスの誓いを用いることにより彼の唯一無二の役割を強調していることを見出す。

「私は助言の正しきアメンの命により、アアムたちを打ち破るため戦士として川を下った。その時私の軍は、燃えさかる爆風のように私の前で勇敢であった。」[32]

コメント：

ここで、カーメスはアジア人たちと戦うために中部エジプトのネフェルシへ向けてナイル川を北上した。戦闘の具体的な様子は、ほとんど示されていない。それどころか、我々ははじめ一切の抵抗なく行われたように思われるネフェルシへの包囲攻撃のことを聞くのである。

3.3 第 18 王朝の王の会議

王がメンバーたちを招集するのを描写する文学形式は、あたかも新王国時代初期の書記が中王国時代や第 2 中間期の標準形式を未だに踏襲しているように継続されていた。

スパリンガー[33]は、王と彼の助言を描いた場面は、このテーマについての中王国時代の記述に基づき、最初に（1）王が現れ、（2）座り、（3）議論する、と考えている。

3.3.1 メギッドの戦い

最も有名な文学形式の一つは、成功を収めた外国への軍事遠征の報告であった。古代エジプト人は、王と将軍たちや助言者たちのあいだの軍事会議を、王とその決断の重要性を強調するために用いた。

メギッドの戦いの詳細は、全体あるいは部分的に、専門的な日誌に加えて、少なくとも八つの付加的な情報源で言及されている。最初の記述では、書記は三つの出来事に深く影響を受けている。すなわち、先導する王の実行力、豪華に飾られた二輪戦車の押収、そして首長たちの服従である[34]。

---

[31] A. J. Spalinger, *op. cit.*, p. 2.
[32] Alan H. Gardiner, *op. cit.*, p. 108.
[33] A. J. Spalinger, *Aspects of the Military Documents of the Ancient Egyptians*, London, 1982, p. 105.
[34] D. B. Redford, "The Northern Wars of Thutmose III," in E. H. Cline and D. O'Connor (eds.), *Thutmose*

我々は、単独統治の最初の年（治世第22年）に偉大な王（トトメス3世）がメギッドの城塞へ進軍し、小アジアにおける大規模な軍事計画を開始したのを知っている。第1回目のメギッドの遠征は、トトメス3世の考えの中でも最も重要な軍事行動であった。

この戦いの出来事は、カルナック神殿のアメン・ラーの聖域の特定の場所に詳細に刻まれた。それはトトメス3世年代記として知られており、カルナック神殿のアメンの至聖所を取り囲む壁にある。この種の軍事的な記述は、グラポウとノスが研究を行った[35]。こうした日誌形式の報告は、書記たちによって表現力豊かに書き記された。彼らは一定の範囲内で共通の語彙を用い[36]、また王が遠征中であるか否かに関わらず、彼らには毎日の王の行動と活躍の記録が委ねられた[37]。

3.3.2 軍事会議

行軍の19日を過ぎて、エジプト軍がイェヘムに着くと、その先のカルメル山を越えるため、その地で野営し休息を取った。その町（イェヘム）の名前は、「見守る」あるいは「守る」を意味する語根に由来し、またワディ・アラへの入り口であり、山脈を越えてメギッドへとのびるアルナ・ロードを守る戦略上重要な位置を表している[38]。

トトメス3世は、多数の敵軍がいるメギッドの町に向かって進撃するための準備として、彼の将軍たち（軍の指揮官たち）と軍事会議を開いたと描かれている。ここでトトメスは、軍隊の指揮者としての王の姿という優れた資質を示し続けている。

デ・バックによれば[39]、アルナでのトトメス3世と将軍たちの会話は、このような場面の歴史的根拠があったと考えられるものの、おそらく事実を記述したものではないであろう。王は、とりわけ行軍と戦闘においては、勝利に満ちた王として描かれなければならなかった。

この軍事会議を開催した目的は、メギッド城塞へ至るルートを決定することであった。城塞へと続く通行が可能でありかつ安全な道は2つあり、1つは南東へ8km先にあるターナク、もう1つは北西へ5km先にあるジェフティと呼ばれる道であった。そして、3つ目のルートは、山を通り抜けてメギッドへ通じているが、そこは狭くて危険であった[40]。

19行目から49行目にかけての文章は、日誌の中に記された軍事会議の通達であった。しかし一語一句そのままの発言は、正確には記録されなかったであろう。

III, A New Biography, Michigan, 2006, p. 331.

[35] H. Grapow, *Studien zu den Annalen Thutmosis des Dritten und zu ihnen verwandten historischen Berichten des Neuen Reiches*, Berlin 1949; M. North, "Die Annalen Thutmosis Ⅲ, als Geschichtsquelle," *ZDPV* 66, 1943, pp. 156-174.

[36] A. J. Spalinger, *op. cit.*, p. 120.

[37] G. J. Shaw, *op. cit.*, p. 92.

[38] R. A. Gabriel, *Thutmose III, the Military Biography of Egypt's Greatest Warrior King*, Washington, 2008, p. 93.

[39] A. de Buck, *Het Typische en het Individuelle bij de Egyptenaren*, Leiden, 1929, p. 17.

[40] F. Maruejol, *Thoutmosis III, et la coregence avec Hatchepsout*, Paris, 2007.

Part 1：日付

治世第23年、夏の第1月、第16日、イェヘムの町で[41]。

ここで日誌は、イェヘムの町へ到着した日付を述べていない。そこには進軍の目的のみしか記されておらず、進軍がどこから始まったかについての詳述がない。終着点は、イェヘムと明記されており、この場所はカルメル山脈北方の小さな丘にあるイェンマと一致する[42]。

Part 2：王の発言

（陛下は）彼の勝利に満ちた軍との会議を命じ、次のように言った。「あのカデッシュの（憎むべき）敵は、やって来てメギッドに入り、現在（そこに）いる。なぜなら、彼はエジプトに従属して（いた）あらゆる国々の指導者たち、そしてナハリンまでもはるか遠く（から）、・・・シリア人、コデの人々、彼らの馬、兵士、（その人々）を自身のもとに集めたからだ。なぜなら、彼が―書かれた通りには―『私は（ここ）メギッドで（陛下と戦う）ために立ち上がるだろう』と言ったからである。おまえたちの心にあるものを私に言ってみよ。」[43]

コメント：

これは、トトメスと軍司令官たちの会議を描写した典型的な日誌である。この日は明らかに、メギッドへ行く最良のルートを論議するための命令が下された、遠征における重要な日であった。

ここでもカーメスの会議のように、王は会議メンバーたちに演説を始めた。しかし「王の物語」(Königsnovelle)の伝統を借用しながらも、この「年代記」は誇大表現を省き、カーメスの演説に特徴づけられるようなあからさまな怒りの言葉はない。トトメスの演説は穏やかでありかつ、情報の報告に基づくものであった。

山越えというきわめて重要な問題がトトメスによって決定されていないことは注目に値する。これこそが軍事会議の論点であったはずである。

この場面は、トトメス3世と彼の軍司令官による会議(*nḏwt-r*[44])で始まる。墓の自伝というジャンルのなかでは、多くの用語が議論とその決定をめぐる王と廷臣のあいだのやり取りに触れていることに我々は注目している。*nḏwt-r*「協議」という語は、しばしば王が神に神託によって意見を求める時に見られる[45]。しかしながらここでは、この語は王と高官たちのあいだのやり取りを描写するために用いられている[46]。それは、議論の前にあるべき王の助言（王の着席）というよく知られている導入を欠いている。そのためス

---

41 *Urk. IV*, 649.; R. O. Faulkner, "The Battle of Megiddo," *JEA* 28, 1942, p. 3.
42 *Ibid.*, p. 2.
43 *Urk. IV*, 649.; R. O. Faulkner, *op. cit.*, p. 3.
44 The term might literally be rendered as "questioning the opinion," H. Goedicke, *The Battle of Megiddo*, p. 27.
45 *Urk. IV*, 833-834.
46 G. J. Shaw, *op. cit.*, p. 76.

パリンガー[47]は次のように考えている。「王の物語」(Königsnovelle)に見られる感情的な演説と異なり、書記は敵の計画の概要を用いて、王が軍司令官たちの考えを尋ねる場面を描いた。ただし、その際「王がどのようにして敵の所在の具体的な情報を入手したか」についての詳細には触れなかった。

直ちに敵軍の構成が議論され、トトメス3世によって示されたように、敵軍が様々な出自の兵士及び反抗勢力の首長から構成されていることが確認された。軍事会議の中でトトメス3世が彼の軍の一部の反応に対して持ち出した第2の点は、戦うべき地点であった。「カデッシュの首長」がメギッドで戦うことを選択した以上、戦争のルールに従えば、これは戦争を仕掛けられた側にとっての権利であろう。彼がこの内容をレポートの記述に入れさせたのは、敵が随分と疲弊した状態にあり、かつ戦闘準備が全くできていない状態にあることにトトメス3世が本当に驚いたという事実を考えたためであろう。実際には彼が戦闘の場所を決めなかったのではという疑問を生じさせるが、彼はこの事を自軍には隠していた[48]。

Part 3：指揮官の返答

そして彼らは陛下に言った。「どうやってこの狭い道（を）行くことができるでしょうか？敵は向こう側で立っており、多数になったと（報告されています）。馬は（馬）の後ろを行くことになり、（兵士たち）や人も同様ではないでしょうか？アルナのあちらで戦うことができずに後衛が立っているあいだに、我々の先頭が戦うことになるのでしょうか？現在ここには2つの道があります。ご覧ください。一つの道は・・・我らの（主）、そしてターナクに出てくるでしょう。見よ。もう一つはジェフティの北側にあり、我々はメギッドの北に出てくるでしょう。我々の勝利に満ちた主が最善と思われる方を進まれますように。しかし、我々にあの難しい道を行かせないでください[49]。

コメント：

ここで我々は、トトメスの軍司令官たちがアルナの道を選択した際、その道が（テキストによれば）、装備を伴う軍を進めるのに適しておらず、その場にいた敵は外側で待機し、膨大な数となっているなどの困難について意見を述べ、彼らが論理的に受け入れられそうな理由を列挙したことに注目する。しかし、トトメスは異なる視点を持っていたのである。

トトメス3世の決意

それから、（あの卑劣な敵に関する）報告書が（もたらされ(?)）、そして軍司令官たちがすでに話をしていた計画について（さらなる議論(?)があった）。王の天幕の中で述べられたこと。「私が（生きているように）、ラーが私を愛するように、私の父アメンが私を寵愛するように、私の鼻孔が生命と力強さで元気づけられるように、私はこのアルナの道を進むであろう。汝らのなかで望む者は汝らが言う道を行かせよ。また望む者は私の軍列に続いて来い。なぜならば、見よ、彼ら、すなわちラーが嫌悪する敵対者は次のよ

[47] A. J. Spalinger, *op. cit.*, p. 107.
[48] H. Goedicke, *The Battle of Megiddo*, Baltimore, 2000, p. 32.
[49] *Urk. IV*, 649-650.; R. O. Faulkner, *op. cit.*, p. 3.

うに言うからだ。『エジプト王は我々を恐れているため、他の道を行ったのか？』と、彼らは言うだろう。」そして司令官たちは陛下に言った「あなたの父アメン、二つの国の玉座の主、カルナックに住まう者が、（あなたの望み）を行わんことを！見よ、我々は陛下が行く所ならどこへでも陛下の軍列に続いて行きます。なぜなら従者は主人の後に続くからです。」[50]

コメント：

イェヘム野営地は、明らかに軍事会議だけでなく、進軍の道筋の指示と最終配置を決めた開催地であった。アルナに向かう際にこそ、このような展開が必要であった。テキストの装飾は、王が勇敢であり、軍が不安になっていることを強調しようとしている[51]。

このパラグラフは、敵の居場所についての追加の報告の到着と関係していると思われる。そのためトトメス3世は、戦いを開始するための安全な場所を選択する戦略上重要な会合を望んだのである。

その後、我々はトトメスがアルナの道を選択する決意をし、そのため、書記が王への奮励を切望するという同様の理由からトトメスが以前のカーメスと同じように誓いをたてたことに気づく。ここでは、王は中心的な役割を演じており、たとえ彼が成し遂げた成功でその能力が全ての者を上回っているとしても、彼は人間味のある人間、英雄にして意思決定者としてその行動に特別な焦点を当てて表現されている。[52]

3.3.3 会議の日時

スパリンガーによる研究によれば[53]、彼は以下のように示している。

a. *Urk.* IV 649.3：イェヘムに到着：16日
b. *Urk.* IV 49.4：イェヘムでのトトメスの司令官との会議(ndjwt-ra)、即座の決定はない：17日
c. *Urk.* IV 650.15：使者（*Urk.* IV 649.17ff.の異なる情報を持つ）の到着と運命を決する王の決意：17日
d. アルナに到着：18日

これら3つのルートのなかで、トトメス3世は3番目の狭いルートを提案した。そのため、彼の将軍たちは王の選択を受け入れなかった。なぜならこの狭いルートは、エジプト軍の危険な列を伸ばし、「馬の後ろに馬、兵士の後ろに兵士」の状態が続き、前衛部隊は後衛なしの戦闘につながるからである。しかし、トトメスは敵を奇襲するために、危険な道を進むことを主張した。他の2つのルートは戦いが始まる前にエジプト軍の動きを漏らす可能性があったからである[54]。

しかしながら、加えて王は、自身の部隊を奇襲と勝利のために危険なルートに沿って率いる一方で、軍

[50] R. O. Faulkner, *op. cit.*, p. 3.
[51] D. B. Redford, *The Wars in Syria and Palestine of Thutmose III*, Leiden, 2003, p. 22.
[52] G. J. Shaw, *op. cit.*, p. 94.
[53] A. J. Spalinger, *op. cit.*, p. 136.
[54] E. H. Cline and D. O'Connor, *Thutmose III, A New Biography*, Michigan, 2008, p. 2.

将軍たちがより安全なルートに沿って部隊を進める自由も与えた。

最終的には、彼らは王に続き、狭い危険な道を進むことに同意する。

コメント：

書記は、敵軍の計画の概略を利用し、軍の司令官の意見を求める王を描いた。これは、カーメスの敵対来な会議の場合とは全く異なる。カーメスは自分の意思を告げたが、そのあと失望の憂き目にあった。その結果、カーメスは激怒し、彼の廷臣を叱責した。一方、こちらでは王も司令官たちも冷静であったため、トトメスの会議は次の軍事戦略を決定することとなった。

三つの会議を分析すると、カーメスとトトメスの会議にはいくつかの違いがある。カーメスは、王の側近である高官を意味する「偉大な人々」を招集した。それゆえ、後に続く報告は、実際の戦闘ではなく、その代わりに起こりうる戦闘における最初の一斉攻撃と関係している。

王は攻撃的な方針を提案したが、廷臣たちは消極的な方法を申し出た[55]。

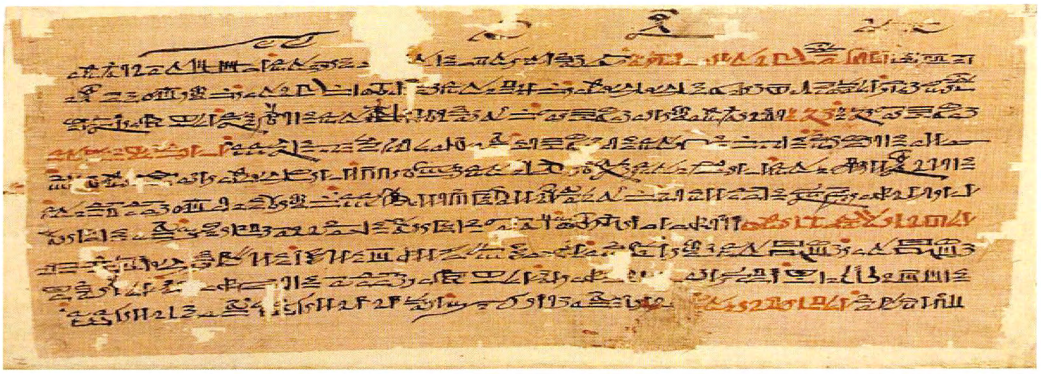
カーメスは立腹したが、民族主義的な戦争計画を維持した。我々は議論に忠実に基づくトトメスの記述をカーメスの報告を対比するが、その一方で後者はまだ行軍中でなかったということには留意しなければならない。トトメスの事例において、実際の戦略が戦争において選択されているのを見る。メギッドの記述では、トトメス3世のイメージは公正かつ公平な人物である。王はためらわず、臆病さをも示さず、また厳格な人物のように振る舞ってもいない。トトメスが有能な戦士であることは、その戦いぶりから推測される[56]。

メギッドの報告書における会議は、戦略上重要な攻撃対象についての記述を避けて、代わりに進軍の戦略と取るべき道に専念しているのである。

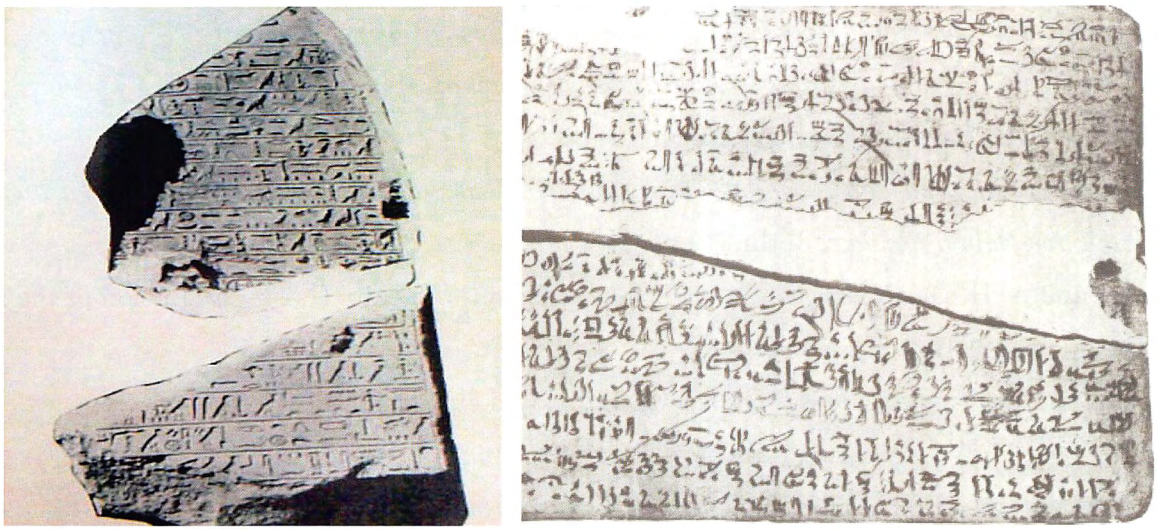
[55] A. J. Spalinger, *War in Ancient Egypt*, Oxford, 2005, p. 102.
[56] *Ibid.*, p. 101.

	対話	会議場所	会議メンバー	意思決定者	王の物語 (Königsnovelle)	会議開催理由	会議結果	会議の記録媒体
アペピの会議	短い	王宮	書記と賢人	書記と賢人	分類されない	政治的不正	脅し文句の発信	サリエ・パピルス１
セケンエンラーの会議	短い	王宮	高官と上級兵士	不明	分類されない	脅し文句への返答	不明	サリエ・パピルス１
カーメスの会議	長い	王宮	高官	カーメス	分類される	カーメスの意思	解放戦争の開始	カーメスの第１ステラと筆記板
トトメスの会議	長い	軍の野営地	軍司令官	トトメス３世	ほぼ分類される	道の選択	アルナを横切る	年代記の間

Figures

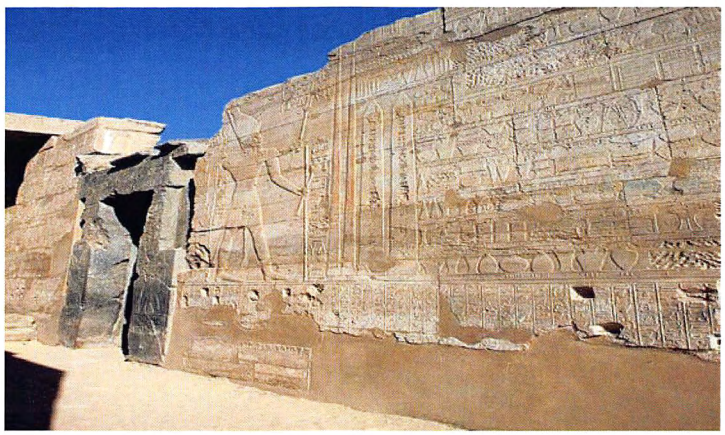


(Figure 1; p. Sallier 1 – British museum)



A B

(Figure 2 A; Kamose first stele, B; Carnarvon Tablet no.1)



(Figure 3: Hall of Annals of Thutmose III – Karnak temple)

参考文献

A. M. Blackman, *The story of King Kheops and the Magicians*, London, 1988

A. de Buck, *Het Typische en het Individuelle bij de Egyptenaren*, Leiden, 1929

A. de Buck, "The Building Inscription of the Berlin Leather Roll," *Studia Aegyptiaca* 1, Rome, 1938

E. A. W. Budge, *Facsimiles of Egyptian Hieratic Papyri in the British Museum*, Second Series, 1923

E. H. Cline and D. O'Connor, *Thutmose III, A New Biography*, Michigan, 2008

R. O. Faulkner, "The Battle of Megiddo," *JEA* 28, London, 1942

A. H. Gardiner, "Late Egyptian Stories," *Bibliotheca Aegyptiaca* 1, Bruxelles, 1932

A. H. Gardiner, "The Defeat of the Hyksos by Kamōse: TheCarnarvonTablet, No. I," *JEA* 3, London, 1916

H. Goedicke, *The Quarrel of Apophis and Seqenenre*, Chicago, 1986

H. Goedicke, *Studies about Kamose and Ahmose*, Baltimore, 1995

H. Goedicke, *The Battle of Megiddo*, Baltimore, 2000

H. Grapow, *Studien zu den Annalen Thutmosis des Dritten und zu ihnen verwandten historischen Berichten des Neuen Reiches*, Berlin, 1949

B. Gunn and A. H. Gardiner, "New Renderings of Egyptian Texts: II. The Expulsion of the Hyksos," *JEA* 5, London, 1918, pp. 36-56

A. Hermann, "Die Ägyptische Königsnovelle," *OLZ* 55, Leipzig, 1960

H. Jenni, "Der Papyrus Westcar," *SAK* 25, Hamburg, 1998, pp. 113-141

D. B. Redford, *The Wars in Syria and Palestine of Thutmose III*, Leiden, 2003

A. J. Spalinger, *War in ancient Egypt*, Oxford, 2005

H. S. Smith and A. Smith, "A reconsideration of Kamose Texts," *ZÄS* 103, Berlin, 1976

A. J. Spalinger, *Aspects of the Military Documents of the Ancient Egyptians*, London, 1982

G. J. Shaw, "Royal Authority in Egypt's 18th Dynasty," BAR Int. Series, Oxford, 2008

M. North, "Die Annalen Thutmosis Ⅲ, als Geschichtsquelle," *ZDPV* 66, 1943

T. Säve-Söderbergh, "The Hyksos Rule in Egypt," *JEA* 37, London, 1951

J. A. Wilson, "Egyptian Historical Texts," *ANET*, Princeton, 1969

W. K. Simpson, *The Literature of Ancient Egypt*, 3rd ed.; New Haven & London, 2003

D. B .Redford, "The Northern Wars of Thutmose III," In E. H. Cline and D. O'Connor (eds.), *Thutmose III, A New Biography*, Michigan, 2006